14.子ども食堂から見る日本の社会：子ども食堂が予示するものとは

上條人生

1.子ども食堂とは

近年、日本では全国的に子ども食堂が増加している。子ども食堂は、「子どもやその親、および地域の人々に対し、無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供するための日本の社会活動。2010 年代頃よりテレビなどマスメディアで多く報じられたことで動きが活発化し、孤食の解決、子どもと大人たちの繋がりや地域のコミュニティの連携の有効な手段として、日本各地で同様の運動が急増している。」(ウィキペディアより)というものである。

今から、私がボランティアとして子ども食堂に参加した経験や、参加したことがある友人から聞いたことをもとに、子ども食堂の実態と、子ども食堂にはどのような課題があり対策を取らなければいけないのか考え、述べていく。

2.子ども食堂の実態と経験して感じたこと

私がボランティアとして参加した子ども食堂は、老人ホームで行われたため、その施設に入っている高齢者の方が多く参加していた。そして、そこの職員さんがスタッフとして調理や配膳、司会等をして下さった。他には、近所に住んでいる家族や児童養護施設に住んでいる子どもたちが参加していた。

先に述べたように、子ども食堂には高齢者や子ども、スタッフなどの大人やボランティアで参加している私たち学生といった、地域の人たちが、普通に生活しているだけでは一緒に関わることが少ないであろう様々な世代が一同に集まり、ご飯を食べ交流するといった空間が出来上がっている。子ども食堂という場があるおかげでこのような体験ができることは非常に良いことだと感じた。

しかし、同時に子ども食堂だけでは対処することが出来ない問題があると感じた。

子ども食堂に参加していた児童養護施設の子どもに話を聞くと。その子の家庭では父親からのＤＶ被害があり、元々は県外に住んでいたが愛知に引越してきて今の施設に入ったと言う。施設の人からも話も聞くと、その施設にいる子どもの多くが過去にＤＶ被害を受けていたそうだ。

また、私の友人が別の子ども食堂にボランティアに行った際、子どもから複雑な家庭の事情を聞いたり、不登校の子どもから暗い話を聞いたりすると、話が重く、上手く返事が出来なかったと言っていた。

私も、まだ小学校低学年の子どもから、そのような話を聞き、咄嗟に何と返したら良いのか正解が分からず、反応に困った。そして、その子たちはそのような経験をしたにも関わらず、違うところに移り、施設に入り、学校へ行き、友達と楽しく遊んでいる様子を見て、可哀想だとは思いながらも新しい環境で暮らすことができているため、少し安心した。

さらに、そのような人たちに必要とされる場所として、子ども食堂があり、1 つの居場所となっていると感じた。

3.子ども食堂から見る課題と対策

次に、子ども食堂の課題は何なのか考えていく。まず 1 つ目は、前提として子ども食堂は

完全ボランティアで行っているため、食材の調達や開催する場所、運営するスタッフやボランティアをしてくれる人などの確保が必要であり、これを一般の人の力だけで賄うことは出来ても、これからさらにより良い質を求めていくとなると、どうしても限界があるのだ。

この対策として、提案することは、子ども食堂をボランティアでやるのではなく、新しいサービスとして子ども食堂を運営したり、子ども食堂に代わる新しいものをつくったりするということだ。

現在、日本でこれだけ多くの子ども食堂が増え、ボランティアとして関わっている人が多くいる。ボランティアだからという理由でやっている人もいると思うが、仕事として子ども食堂のようなサービスを展開するとしたら、やりたい人がたくさんいるのではないかと考える。さらに、仕事として運営することにより、資金が増え、今よりも良い質でサービスを提供できる。

また、現在の日本は高齢化社会であり、これからさらに進むと予想され、高齢者にとって、年金や老後資金といった、お金の問題が深刻化してきている。今後、年金が貰える額が減少したり、老後資金として約 2000 万円という多額のお金がかかるため自分で貯めておかなければいけなかったりという問題があるが、実際一般人からしたらなかなか難しいところである。しかし、子ども食堂でボランティアをしている人の中には、定年退職をされた人や年配の人も多くいる。その人たちが仕事として子ども食堂をすることで、年金問題や老後資金の問題への対策にもつながる。現状、その人たちの力で子ども食堂は運営することができているため、正規雇用は難しいかもしれないが、パートや短期間だけの雇用だけでも、お金を稼ぐことができ、高齢者にとっての助けにもなると考える。

2 つ目の課題は、子ども食堂は、子どもの貧困や孤立といった問題に対しての一時的な対策なだけであり根本的な解決策にはなっていないということだ。子ども食堂は交流や食事の問題には有効だが、子どもが家で充分にご飯を食べることができないことの要因は、親が片親である場合、寝る間も惜しんで仕事をしたり、休日も出勤してお金を稼いだりすることで、このようなことになっている。そのため、これほど働かなくてはいけないということが問題であり、子ども食堂はその直接的な解決策にはなっていない。

この対策として考えられることは、貧困や一人親世帯への支援を強化することである。今や、日本国内での一人親世帯は少なくなく、実際、私の家庭も母子家庭である。やはり、片親の家庭は両親がいる家庭に比べて、お金が少なく、私の母もよく残業をしたり、休日も仕事をしていたため、家で兄とご飯を食べたり、1 人で食べる時もあった。この問題に対しては、一人親世帯への経済給付や生活支援をより良くすることで解決につながる。

さらに、家庭のお金の事情で子どもが自分のやりたいことのために勉強ができないということもあるため、給付型奨学金の対象を増やしたり、大学進学の支援を強化したりすることで、貧困や孤立への直接的な解決策になると考える。

4.地域のつながりがもたらすもの

近年、特に都市部ではすぐ近くに住んでいる人ですら知らず、地域としての関わりが全くないという場所が多くある。確かに、お互いに干渉し合わないことで近所トラブルが生まれないというメリットもあるが、何か困った時、自分だけ、または自分の家庭だけではどうしようもできず他人を頼りたいという場面もある。そのような時に、今の状況では到底、助け

を求めることは勇気がいることであり、迷惑だと思ってしまう。

実際、家庭内で何かトラブルがあり、生活するのが困難になり、自殺をしたり、止む無く家族を殺してしまったりするといったニュースも度々ある。近所の人と親密な関係であれば、自分の家庭だけでは解決できなかったことも、他人の手を借りることで防げる可能性もゼロではない。また、地域が密接な関係にあることで、住んでいる場所の居心地がよくなり、近所の人と気軽に話したり、時には相談したりすることができる。

私の地元は田舎で、近所のつながりがある方だった。そのため、子どもの頃は外で遊んでいると、近所の人がお菓子やアイスをくれたこともあったし、公園などで遊ぶ時も、今の都会だと、どんな人がいるか分からないから危険という意見もあるが、近所の人は顔を大体知っているため、近所の大人がいることだけで対策にもなるといった、目に見えないところでの利点もたくさんある。

また、上述したように私は母子家庭で育ったため、母が残業で帰りが遅く、保育園の迎えに来られない日もときどきあった。そのような時は、近所に住んでいる親同士も仲が良い同い年の子の家に一緒に帰り、私の親が仕事から帰ってくるまで遊んでいることもあった。このようなことは地域でのつながりが無ければできないことであるが、昔だったらこのような関係性は当たり前であった。

5.子ども食堂が予示・啓示する新しい社会のあり方・かたちと、子ども食堂がもつ潜在的な可能性とは

子ども食堂が予示する新しい社会とは、昔のように、地域が密接につながっていて、さらに、新しい交流の場があるような社会だと考える。

子ども食堂はそのような地域作りの第一歩である。子ども食堂は名前の通り、子どもが主であり、それに親や地域の人も少し加わっているという、比較的限られたコミュニティである。

しかし、子ども食堂というコミュニティが、3 章で述べたように新しいサービスに取って代わることで、より大きくなり質も向上し、地域全体に広がれば多くの人が利用することができるようになる。

そして、それが今後、全国的に広まり、日本の社会の一部として日常に入り込むようになると、日本社会において重要なものになり、たくさんの人に必要とされるものになっていけば、貧困や孤立の問題の解決に近づく。さらに、子ども食堂特有の、普段関わることが少ない多世代の交流ができるといった面でも、その交流ができる新しい場所へと変化させることができると考える。

これまで述べてきたように、子ども食堂には良い点もあれば、課題もある。良いところはそのまま伸ばしてより良い質を求め、課題は様々な対策をすることで、改善ができる。

つまり、子ども食堂は、日本の地域のつながりや交流の場としての潜在的な可能性を秘めていて、さらに進化することで、日本社会にとっての大切な役割を持つことができると考える。全国的に子ども食堂が広がってきているとは言え、まだその存在を知らない人もいる。しかし、子ども食堂という場を必要としている人も多くいるということも確かである。
今後、子ども食堂、あるいはそれに取って代わるものが、より多くの人に必要とされる居場所になり様々な社会問題の手助けになっていって欲しいと考える。